

伊藤桂一

風車の浜吉・捕物綴

隠し金の絵図



伊藤桂一

隠し金の絵図

風車の浜吉・捕物綴



かくがねえず
隠し金の絵図

風車の浜吉・捕物綴

一九九一年八月一日 印刷
一九九一年八月三〇日 発行

著者 伊藤桂一

編集人 深瀬正頼

発行人 戸田栄輔

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋／大阪市北区堂島／北
九州市小倉北区紺屋町／名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

万一、落丁・乱丁の場合、小社でお取りかえいたします。

© Keiichi Itoh Printed in Japan 1991

ISBN4-620-10446-9

目次

第一話	甲州屋の犬	5
第二話	頸に巻いた扱帯	31
第三話	牡丹のような女	57
第四話	冥途から来た男	82
第五話	青磁の花瓶	108
第六話	隠し金の絵図	133
第七話	銀の鷺	160
第八話	幽霊からの文	185
第九話	ムササビが飛ぶ	212

装帧 佐多芳郎

隠し金の絵図

風車の浜吉・捕物綴

第一話 甲州屋の犬

駒込村——の、妙蓮寺の裏手に、堀割が通じていて、そのほとりに、薄にまじって、野菊がよく咲いていた。

根津あたりから歩いて、さして離れた場所でもないのだが、このあたりへ来ると、ふいに気分が田舎じみてくる。

日暮れ方で、残照が、あたりを染めはじめている。

その残照の中に、三人の男が立っている。ひとりには、商家の主人らしい五十年輩、それにその商家の番頭と手代らしい風采の、ふたりである。堀割の向こうから来る船を待っているようで、ときどき、交互に首をのびすふうにして、堀割の先をのぞきみたりしている。そこから先はずっと田畑ばかりの景色がひらけていて、両側を草の茂った堀割がひとすじ通じているのである。

「もう、定められた刻には、なっておりますようね」

と、主人らしい男がいうと、番頭が、

「来たようですぜ。櫓の音がきこえます」

と、いった。

そこで、三人とも、いっせいに、緊張した顔つきになった。

向こうから、小さな田舟が一艘やってきた。奇妙な男が、ひとりで櫓を漕いでいた。奇妙な——というの、手製らしい粗末な頭巾を頭からすっぽりかぶっていたからである。眼のところだけが出ている。つまり、面体をかくしているのだ。

頭巾の男は、三人連れのいるところで田舟をとめると、今度は棹をあしらって舟を岸へ寄せ、それから、土手の上にいる三人を見上げた。

「豹右衛門さんのお使いの方でございますか」

と、主人らしいのが呼びかけると、頭巾の男は、

「鬼瓦の仲間の者だ」

と、短く、感情のこもらない、低い声でいった。

「それでは、番頭に、お約束の金をもたせますので、どうかお受け取りください。そのかわり、娘の身柄は、できるだけ早くおもどくださるよう、お願いいたします」

主人がそういうと、番頭が、木箱に詰めて風呂敷でしっかり包んだ、金のはいった荷を提げて、堤を下りてきた。番頭は、その荷を、舟にいる男に渡しかけたが、荷が重いので、そこで足を踏みすべらせてよるめき、はずみに、舟の上に立っている男にとりすがったが、ともかく、無事に金の包みを渡すと、会釈をしてもどってくる。

頭巾の男は、あとは、ひとことも口をきかず、舟を岸から離すと、また、元来た方角へ漕ぎもど

ってゆく。土手の三人は、それを黙って見送っていたきりである。どこに監視の眼があるかわからないし、動けない。

しばらくして三人は、力の抜けた足どりで少々あともどりをして来て、道を、寺の塀に沿って廻って行くと、じきに山門の前に出る。それをくぐって境内へはいった。

境内の片隅には、身をひそめるようにして、三人の男がいた。ひとりとは、同心らしい恰好の三十年輩、あとのふたりのうち、ひとりとは、人相のよくない二十七、八にみえる瘦せた男である。もうひとりとは、それよりも若い。それと、傍らの木に、犬が一匹つながれていた。

同心——が、山門をはいってきた三人に、近づいて来ながら、いった。

「塀の上から、こっそりのぞいてみたが、あのいでたちでは、人相もなにもわからぬな」

「ですが、あれは、ただの町人ですよ、旦那」

と、番頭（に扮したのが）がいった。

「そうか。気のついたところを、いつてみてくれ」

「あの男は、四十前後で、家の中で仕事をしている職人とみました。手つきですが、心持ち、猫背です。櫓はよく漕ぎますが、これは海辺の生まれだからでしょう。声は、こしらえておりましたが、精いっぱい、ふるえをこらえているあんばいのように受け取れましたね。鬼瓦——の仲間じゃござんせんね。もうひと息待って追います。あの男が、岸へ上がるまでは待ちませんと。万一のことも、ありますので」

「みすみす二千両、召し上げられたか。なんということだ。——おい、追い切れるのだろうな」

「それは、手前よりも、どうやらこいつのほうが、よく知っておりますよ」

といって、番頭（これが浜吉というわけだったが）が、傍らにつないである犬をゆびさした。犬は、毛並みの黒っぽい甲斐犬で、なかなか利口そうにみえた。

「いらいらと、待つてゐる気分は、やりきれねえもんですねえ、親分」

といったのは、手代に化けていた、御用聞小日向の喜助のところにいる留造である。同心は岡沢義十郎で、人相のよくないのは、狸々の銀という、元をただせばやくざである。いまは、発心して、浜吉を助けている。

いつときたつて、浜吉がいった。

「では、追いますか、旦那。（それから商家の主人に）甲州屋さんは、犬を曳いてきておくんなさい。——どうか、うまくいってけると、いいんですがねえ」

甲斐絹から印伝革のつくり物、味噌、酒の類にいたるまで、甲州の物産を手広く扱っている、茅町甲州屋万兵衛のひとり娘なみが、何者かによつて、かどわかされたのは、一日前の、根津権現の秋祭の日のことである。

この日は、ひる前に、女中が付き添つて祭の見物に行ったが、人ごみの中で、ふたりは束の間、離れ離れになった。女中が気づいてなみの名を呼んだが、それきりなみの姿は出てこなかったのである。なみは十一歳で、迷子になる齡でもないし、女中は狐につままれたような氣になったが、先へ家にもどつたのかと思ひ、急いで帰つたが、まだもどつていなかった。家人も、はじめのうちは、

朋輩^{ほうばい}にでも会ったのだらう、というくらいに考えていたが、虫の知らせというものがある。昼を過ぎると次第に気がかりになり、手分けをしてさがし廻ったが、なんの手がかりもなかった。甲州屋ではだんだん不安が増し、夕暮れどきになると、当然（もしや、かどわかされでもしたのでは？）と、不安な顔を見合わせるようになったが、夕闇^{ゆぐ}が濃くなりはじめるところになって、見知らぬ子供が、万兵衛のところへ手紙を届けに来たのである。もっとも、子供も、駄賃をもらって、人に頼まれたのだが、甲州屋では、文面をひらいてみて、びっくりした。娘のなみが、かどわかされたものであることが、はっきりしたからである。身代金^{みのしろきん}を請求されている。

左手で書いたらしい、ぎごちない文字で、つぎのように認^{しん}めてあった。

娘なみどの、鄭重^{ていじゆう}にお預かり申しおり候。お返し申したく存ずるにつき、明夕刻七つ半、駒込妙蓮寺裏の河岸^{かし}へ、身代金貳千両持参せられたく願ひ上げ候。当日、船にて、船頭ひとり受け取りに参る故「豹右衛門の使いか」と申されれば、船頭が「鬼瓦の一党也^{なり}」と答えるにつき、これを合図として金子お渡し下されたく、金額確認の上、娘なみどの返上。船頭に万一のことありても、また町方へ通告ありても、娘の生命は保証しがたく、右、念のため申し添え仕^{つかまつ}り候。

鬼瓦組一党

甲州屋万兵衛殿

文面は、一見、子供のいたずらじみたところもあるが、よく読むと、へんに慇懃^{いんぎん}で、不気味な感

じが漂う。

万兵衛は、甲州人らしい性根のすわったところがあつて、手紙をことづかつた子供を連れて、根津宮永町にある御用聞の浜吉のところへ訴えに来ている。それで、この一件は、町方の手に移ったのだが、連れてきた子供は、きいてみても、手紙を頼んだ男そのものが、さらに人に頼まれていたものらしく、要領を得ず、結局、帰した。

「したたかな連中らしいな。よほど覚悟をしてかからにやなるまいよ。ともかく、身代金だけは、用意なさつたいたほうがいいね。ひとのいのちにかかわることだし。ま、できるだけのことはやりますが、事が事だし、お宅さんでも、力になっておくんなさい」

浜吉は、落ちついた物腰で、そういつている。

浜吉——は、昔、根津の親分と呼ばれて、名を売ってきた御用聞だが、故あつて、咎をうけて、十手捕縄も召し上げられ、江戸を追われていた。

五年たつて、その江戸へもどつては来たが、小石川白壁町の長屋に、子連れ女房のお時と一緒に住んで世を忍び、お時は牛天神下の小料理屋で仲居をして働き、浜吉は、諸国流浪の間に覚えた竹の風車をつくつて、これを小石川伝通院の境内で売つて、身すぎ世すぎの助けとしてきた。この風車というのは、五本の細い竹ひごで蛇籠の形を編み、出てくる末端十本に色紙を貼るといふ、擬つて風流な、美しい風車である。少しの風にも、よく廻つて虹を誕む。

小日向の喜助のところにいる留造は、ときどきお時の連れ子の松太郎にやる手土産を持つて、

「とつつァん、元気かね」

と、声をかけにきた。浜吉は、その都度、留造の顔色を読んで「貰いたくない、手土産だねえ」などと冗談をいいながらも、捕物相談に、のってやってきた。なにぶん、小日向の喜助は、浜吉の餓鬼のころからの仲間だし、喜助は、浜吉の捕物の腕を惜しんで、折をみて、元の仕事にもどってもらおうと考えている。そのために、留造を寄越すのである。喜助は、ずっと足を痛めていて、動けないのだ。

喜助の上司になる定廻り同心の岡沢義十郎、そのまた上司の与力の風早佐市郎も、浜吉のことはよく知っている。それで、とうとう、浜吉も逃げ切れず、表立ってお上御用を勤めることにして、白壁町の家も引き払い、新規蒔直しに、昔懐かしい根津の地へもどってきたのである。

「うちの親分がもどって来なさるなら、住居はあたしに心配させてくれませんか」

といって、宮永町の裏通りの、ちょうど空いていた一軒を貸してくれたのは、浜吉も昔から知っている、彦八という家主だった。

「悪いけど、家賃はもらわないからね」

と彦八はいったが、そうもいかないもので、気持だけでもとってもらうことにしたのだ。

そうして、店を張っての、いちばんはじめに持ち込まれた一件が、この、甲州屋の娘のかどわかしだったのである。

ついでに、もうひとつ、猩々の銀のことを、いい添えておかねばならない。

浜吉が、伝通院の境内で、風車の店を出している時だったが、ある日、ひょっこり、銀がやって

きたのだ。狸々というのは、銀が飼っていた闘鶏の名からついた呼び名である。銀は、界限かぎわからは毛虫のように嫌われたやくざだし、浜吉ともきびしいぎこぎさを持ったこともあるが、その後、浜吉の世話になったこともあって、やくざの足を洗いたくなったらしかった。銀は、いつにない神妙な顔で、

「親分、今日はちょっと、頼みがあつて寄つたんですがねえ」

といったが、その口ぶりにも、なみなみでない決心があるようにみえたのだ。

「まア、掛けな。日は長いんだから」

といつて、浜吉は、銀を莫座もざの上にくつろがせ、きいてみると、風車つくりを習いたい、というのである。

「ほう。闘鶏つかいのお前さんが、かね？」

と、念を押さざるを得なかった。

「風車でもつくつて、世の中をまっとうにやりてえと思ひましてね。どうも親分のおかげで、あぶないのちを助けてもらつてから、やつと、眼のあいた気がしてるんです。いけませんか？」

「いけなかないさ。お前が風車屋になつてくれりゃア、江戸中の人泣いて喜んでくれようというもんだ。だがな、そこで相談だが」

と、浜吉は、ひと息入れて、いった。

「どうだね、風車は、ひまひまにつくつたり売つたりするとして、おれの仕事を手伝わないか。お上御用の仕事だ。お前さんはいままで、お上に手を焼かせてばかりいたが、これからは罪ほろぼし

に、ちっと江戸の人たちのために、役に立ってくれないか。つまり、おれと組むんだよ。おれはお前さんが気に入っていてね、よしやろう、といってくれれば、おれもお上の御用を受ける気であるんだ」

「ほんとかね、親分。ありがたいことをいってくれるもんだ。いやも応もありやしませんや。たいたい、このいのち、親分に預けますよ。もっとも、親分の買いかぶりもいいところだが、まあ、闘鶏を飼うつもりで、気楽に使ってやっておくんない。委細、お頼ん申します」

改まって、きつちりと手を突く。やくざ上がりだけに、言葉の歯切れもいい。

「そうか。つきあってくれるか。これできまったな。なにしろ、このところ毎日、小日向から、せっつきに来るのさ。では、善は急げだ、これから一緒に喜助のとこへ行こう。お前の、苦味走ったいい男のとも、みせてやらねえとな」

「自分のほうは、少し、おどしのきく顔をしてるほうが、いいですよ。親分がなにしろ、ほとけ顔だからね」

と、軽口も口に出て——この時から、浜吉は銀を手伝わせて、元の、根津の浜吉にもどることにしたのである。

ただ、浜吉は、十手捕縄は預からなかった。遠慮をしたのでも、嫌ったのでもない。

「その場その場で、棒を振り廻すなり、石をぶつけるなりいたしますんで」

と、岡沢同心には、冗談めかしてそう答えているが、むろん、浜吉なりの考えもあったからである。

——さて。妙蓮寺の山門を出てきた六人と犬一匹の団は、橋を渡り堀割沿いの東側の小道をたどった。頭巾の男が、堀割のどちら側へ上がったかは見当もつかないが、浜吉は、東側とみたのだ。犬は、甲州屋の主人にいちばん馴れているから、万兵衛を先に立ててゆく。

二丁近く歩いて、乗りすてある舟をみつけた。舟は、それまでにも二、三艘みかけたが、見過ごしてきた。

「あれだ。舳先の傷に見覚えがある」

と、浜吉がいったのは、さきほど、よくみておいたからである。

犬の動きが、活潑になった。ぐるぐると、あたりを嗅ぎまわり、それから、今度は、万兵衛を引きずるようにして先を急ぐ。舟を乗りすてたところから、さらに半丁ほど先の、畦道ほどの細い道を東に折れ、その道をたどりたどりに、道灌山どうかんやまの方向をめざしている。このあたりはどこも田畑ばかりで、あちこちに、木立があり、農家がある。

「この道を四、五人で、急ぎ足で歩いていますねえ。道を踏み外して、爪先を畦に突っ込んでるのがあるし、妙に殺気立ってるもんを感じますよ」

浜吉は、前に行く岡沢同心に、そんなことをいっている。

犬の急ぐに任せて、二丁ばかり道をたどると、その道は、竹藪たけやぶの中を抜けてゆく。その竹藪の中のひとところで、犬の足がとまり、いそがしげにあたりを歩き廻る。

「綱を、離してやっちゃくれませんか」